

## 車いすを介した海外協働事業 “さくら車いすプロジェクト”

## 車椅子と技術を贈る

NPO 法人さくら・車いすプロジェクト 理事長  
 一般社団法人日本車椅子シーティング協会 理事  
 有限会社さいとう工房 代表取締役 齋藤 省

## 【さくら・車いすプロジェクトとは】

当プロジェクトは、日本で不要になった中古の電動車椅子を全国から提供を受け、コンテナでパキスタンに送り、それを現地障がい者団体の当事者が整備し配布して行く活動です。その整備やシーティング技術を日本の JAWS（日本車椅子シーティング協会）のメンバー等専門家が伝承に赴き、身体に合った車椅子を長く安心して使用できるインフラづくりと、技術の習得を持って経済的自立を目指している。その先には「車いすトレーニングセンター」として近隣の国々からも学びに来られる場に育つことを描いている。

パキスタンからのニュースと言えば、アルカイダとかテロ等、殺伐しているものばかりだが、障がい者の世界では、このような日本との交流が育まれている。



提供者



整備するマイルストンのメンバー達



贈呈式

## 【その始まり】

「さくら車いすプロジェクト」の始りは2つの流れからであった。一つは2000年頃より、全国自立生活センター協議会（以下 JIL）と協働で当社（さいとう工房）はアジア各国から研修に来られた障がい者が帰国時に持ち帰れるよう中古電動車椅子の提供をしていた。それも数十台になると故障が出始め、その修理に韓国やタイそしてパキスタン等を訪問するようになった。その現場で同時に見たものは修理技術や身体に合わずフィッティングの概念がない環境での普及の難しさだった。それは様々な NGO から贈られた手動車椅子も同じで、当時「難民を助ける会」がインドで調査したデータでも、せっかく届けられた車いすが有効に利用できていない現状を示していた。

## 【もう一つの流れ】

2003年にダスキンのアジア太平洋障害者リーダー育成事業で来日した、パキスタンの青年シャフィック氏が、日本で体験したアクティブな車椅子の製作を志し、手さぐりで挑戦していたことであった。そこに2005年パキスタンに8万人の死者を出す大地震が襲った。その救援活動に参加した彼らは、車椅子の必要性を更に強くし、本格的に車椅子の技術を学びに来日することになった。JIL や W&P/現在の日本車椅子シーティング協会（以下 JAWS）の協力でシャフィック氏の弟のハビブ青年が来日し車椅子製作の集中研修が実現した。また製作費も世界銀行への支援要請が叶い、翌年彼らはパキスタンで2300台の車椅子を製作し被災者達に提供した。人間を運ぶだけの病院型の車椅子しか目にするのがなかった彼等に、アクティブに動ける車椅子は希

望を引き出し、もっと多くの人に提供できるようムーブメントが起こり、2008年ついに政府を動かしてパキスタン独立記念日に大統領自から「車椅子の交付制度施行の発表」という劇的な出来事につながった。これはシャフィック達が描いた以上のものだったかもしれないが、そこにあっても筋ジストロフィーや重度のポリオの人など車椅子を漕げない人達にはその恩恵が届かなかった。



車いす技術トレーニング



横浜リハビリセンター見学



パキスタン製車いす

### 【電動車椅子の有効利用プラン】

手動を使えない彼らにも・・・これ迄の取組を上手く活かせば電動車椅子を利用できるのでは・・・。日本では毎年5000台を超える電動車椅子が全国で支給され、同数が不要になっている。それを一ヶ所に集めてコンテナで送付したら安価に送れる。車椅子造りを成功させたシャフィックのいる自立センター「マイルストーン」のメンバーなら修理等も出来るようになるのではないかと。パーツと技術があればいつ迄も使用でき、直せないものは2台を1台にしたり、交換パーツにもなる。その技術は障がい当事者達の収入源につながれないか・・・そんな構想が湧きあがった。

修理やシーティング技術はJAWSの得意分野である。その場が車椅子の技術トレーニングセンターに育てば、近隣の国々からも学びに来れるようになる。そして日本から赴く技術者も友人ができ、視野も広がり、10年後の業界にきっと新しい流れを生み出すのではないかと。

また物を送るだけでは「もらうこと」を助長し、自立しにくい現実が過去の支援には多くあった。それ故これは「自分たちで切り開く」志のある人達（カウンターパート）との協働事業であることが重要で、そのロールモデルとして、ダスキン研修の卒業生であるシャフィックのいる自立生活センターは最善のパートナーであった。

### 【初めての送付】

「さくら・車いすプロジェクト」案は固まり、発起人として「全国自立生活センター協議会（JIL）」や「日本車椅子シーティング協会（JAWS）」そして自立生活センター「メインストリーム協会」「DPI日本会議」等パキスタンにゆかりのある団体と、既に当社で働くようになっていたハビブ氏の存在が大きくあった。そして2011年4月NPOとして認証され登録することができた。



さくら協力システム



NPO 発足会議



コンテナ積み込み

2011年7月、初のコンテナは53台の中古電動車椅子を積み込み、11月ラホール市にある「マイルストーン」に到着した。

そして開催された第一回車椅子技術ワークショップには、企業や大学からの協力者も参加して、可能性への予感にワクワクしながらのスタートとなった。

しかしその道も平坦ではなく、カラチ港で陸揚げできず膨大なコンテナ保管料を請求されたり、テロのセキュリティによる積荷検査の強化やバッテリーの入手問題等々、常に山あり谷ありの連続だが日本側もパキスタン側も、その都度正面から取組んできた。



ラホールに初到着した電動車椅子



第一回技術セミナー



3都市合同技術セミナー

### 【5年経って】

車椅子も送料自己負担ながら多くの方々の協力の上、16年4月迄に7回のコンテナで累計400台程の電動車椅子が送られた。セミナーもこれまで10回程開催され、現在マイルストーンがあるラホールだけでなく、イスラマバードやカラチの団体にも提供されるようになった。

昨年はその3都市から代表達が来日し、交流会を開催することもできた。

5年経って未だ課題は山積しているが、街でも車椅子を見かけるようになり、可視化された問題は様々バリアフリーを生み出し、ラホール市ではノンステップバスも走るようになった。支援者によって土地が提供されトレーニングセンターの建屋も立ち上がった。

現在は JICA の草の根技術協力助成や外務省の NGO 連携支援も叶い、イスラマバードの国立科学大学 (NUST) との技術協力も生まれ、パキスタンの新聞やテレビでの紹介や大学でのプレゼンもしばしばある。今年は職業訓練校の車椅子技術の先生が講師に赴いたりもした。過日東京で行われた JICA での報告会には、パキスタンから来日された当事者、介助者6名が、電動車椅子を手に入れ変化した記録映像や感動的な感想を届けてくれ、関係者は皆このプロジェクトの交流で生まれた喜びで満たされた。



パキスタン3都市代表来訪



第7回コンテナ積み込み見学



来日したマイルストーンメンバー

### 【車椅子クリケット大会】

この活動が始まった2011年「車椅子クリケット」のトーナメントに招待された。これはアクティブに動ける車椅子を手にした彼らが生み出した車椅子スポーツです。世界のスポーツ人口第二位のクリケットは、イギリス領だった南アジアでは熱狂的なスポーツです。パキスタン全土から集い汗を流してのプレーと歓声、そして地

域の有力者や芸能人によってトロフィーが授与され、マスコミも来ている晴れがましいものだった。認められる機会が少なかった彼らが、拍手と歓声を受け誇り一杯に活躍している姿は、受け身ではなく自ら切り開いた自信に満ちたものだった。



車椅子クリケット大会



車いすクリケット女子チーム



日本で研修したアジアの仲間達

昨年この車椅子クリケットはネパール、インド、バングラディッシュ、スリランカ等にまで広がり交流試合も行われていることを知った。もし一人の青年が日本に来てまで技術を学び、アクティブに動ける車椅子を自国で生み出す挑戦がなければ、このクリケット大会はまだ産まれていないだろう。日本の企業や団体が撒いた絆の種（願い）は、いまバラバラになりそうな激動の世界において様々に芽を出し育っていることを思う。「さくら」も、その一つの活動として、これからも多くの方々との協働でその輪を広げて行きたいと願っている。